蚊帳屋又左衞門

御蚊帳方　綾小路柳馬場東へ入

〔柳亭筆記〕綟賣　さらし賣○附紙帳賣中略

上京染享保乙巳露月月並題浪人、一聲のひゞくや生平ならざりし、夫山三都の句に見えたれば、いづくにもありしなるべけれど、他國は知らず、今江戸には絶たり、蚊屋賣のみはあれども、たまゝ〳〵ならでは聲をきかず、因に云、昔は何事も質素にて、下人は多く紙帳を釣たり、故に紙帳を賣きたりし事あり、富士石延寶七年印本、調和撰、雨晴て聲いや高し紙帳賣、宗也、向の岡延寶八年印本、不卜撰、夕立やあるが中にも紙帳賣、立澤子、文化十二年九十三歳なる老人の筆記、飛鳥川といふ寫本に、昔夏近くなればでんとゝじ紙衾なりといふ物を商ひたるが、今は少しとあり、こゝに記されしごとく、今も棚にては商へども、その家おほからず、まして、やふり賣に來りしことは、ふるき冊子にも見えざれども、二句まで證あれば、延寶の頃はもはら賣きたりし事必せり、飛鳥川といふ同名の書多くあり、故にかく初めにことわりしなり、誘心集寛文十三年印本、種寛撰、冬雜引しぶやもみぢの錦紙子賣、千之、隱蓑延寶五年刻、以仙撰、時なるを紙子うる聲初時雨重政、夕紅元祿十年印本、調和撰、仙臺の淨瑠璃聞ん紙子賣、花畝、彼地は今も紙巾の名産也、むかしより紙子の類は他國に勝れしなるべし、此三句をてらし合せて見るに、是も賣來りしものなるべし、

〔嬉遊笑覽十商賈〕古老云、寶永の末、大坂に天滿喜美太夫といへる者、說經淨るりの名人にてありしが、幾玉の茶屋にて口論し、これに付て江戸に下り、名をつゝみて居れり、一とせ吳服屋蚊屋を賣荷持にやとはれて、萌黃の蚊屋と呼に節を付て、美聲を高くはり上たれば、聞人これをめでゝ、此年蚊屋大に售たり、これ蚊屋うり呼聲の始なりといへり、されど前に晒うり有り、川柳點前句付、らかんじは萌黃のかやのやうに呼げに羅漢寺勸化のよび聲も、今のごときは蚊屋賣以後の事なるも去るべからず、○下略

〔守貞漫稿六生業〕蚊帳賣　近江ノ富賈ノ江戸日本橋通一丁目等、其他諸坊ニ出店ヲ構フ者アリ、專